

民主化闘争情報

No. 888
2013年10月3日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

JR北海道での一連の事故・不祥事を受け、『週刊文春』がJR北海道労組（北鉄労）に関する記事を掲載したことは、既報の通りだが（民主化闘争情報No. 886、887）、本日発売の『週刊新潮』でもJR北海道の労組事情に言及している。

筋金入りの最大労組が幅を利かす！？ ～『週刊新潮』もJR北海道の労組事情に言及～

記事では、2年前の石勝線のトンネル内で特急列車が脱線・炎上し、79人の乗客が負傷した事故後に中島社長（当時）が労務政策の見直しを図ろうとして、北鉄労と対立したことが自殺の背景にあると指摘している。

JR北海道の労組事情はどうなっているのかというと、**JR総連傘下の北鉄労（JR北海道労組）が全組合の8割以上を占めている。JR総連といえば、再三にわたって、“革マル派”との関係が取り沙汰されてきた組織だ。**実際、鳩山政権では、極左暴力集団である革マル派の活動家が、JR総連に相当浸透しているとの公式見解を表明している。果たして、この北鉄労、どんな活動をしているのか。**「2年前、石勝線のトンネル内で特急列車が脱線、炎上し、79人の乗員乗客が負傷する事故が起きました。それを機に、当時の中島社長は労務政策の見直しを図ろうとしていたのです」**と、JR北海道の幹部社員は振り返る。

「でも北鉄労は、労使間協議を行わずに休日出勤や時間外労働を組合員に押し付けたという“36協定違反”を持ち出し、逆に経営陣を責め立てた。その心労が重なって、中島社長が入水自殺に追い込まれたというのは衆目の一致するところですよ」

それでも会社側への抵抗は収まらなかった。「当時、他のJR各社ではすでに実施されていることでしたが、うちでも乗務前の運転士にアルコール検査を導入したのです。すると、北鉄労は“社員を信用しないのか”と検査拒否を続けた。世間からの批判を浴び、ようやくここに来て、検査を受けるようになりましたけど、とにかく安全よりも自分たちの勝手な都合が第一なのです」（同）

そこへ持ってきて、目の敵にしているのは、会社の経営陣だけではないという。**「職場の同僚であっても、同じ北鉄労所属の組合員でない場合は、結婚式に招待することも逆に出席することも禁止されている。もちろん、忘年会や送別会も別々。他の労組の組合員と酒を飲みに行ったりすれば、北鉄労の幹部から“なんで、あんなヤツと付き合ってるんだ！”と突き上げられると聞きました」**（同）

要するに、JR北海道は財政難で経営が逼迫しているうえに、**筋金入りの最大労組が幅を利かせ、ニッチもサッチもいかない状況に追い込まれているというわけだ。**

立て直しの方法はあるのだろうか。鉄道アナリストの川島令三氏の話。
「（中略）併せて、国有化後のJALと同じように、**大規模な組織改革に踏み切って労組問題を解決するしかないのです**」

**JRに革マル派はいらない！
安全問題で胸襟を開いた議論のできる健全な労使関係を構築しよう！**